生活文化と自然教育
—日本の生活行事の視点から—

須賀由紀子

生活文化学科

Quality Life and Education in Nature
— From a Viewpoint of Japanese Traditional Annual Events —

Yukiko SUGA

Department of Human Sciences and Arts

In our modern society, it may become more important to give a good outdoor education for children, such as playing and studying in nature. In fact there are many kinds of outdoor education programs, it will be time to be needed to think about how to qualify them. To search for this issue, the author pays attention to the value of Japanese traditional annual events, which have been created from the mind of intimating and respecting nature. As a result, the author finds out their important role for maturing children's healthy minds and bodies, because they may have a power of 'classics in life' in the same meanings as 'classics in literature'. From this perspective, the present author concludes that we need to use the fundamental form of traditional annual events in the outdoor programs. In order to do that, it is pointed out that the planners of outdoor education will need to study seriously about the meanings as well as forms about the traditional annual events. In addition, the knowledge of Japanese classical literatures and arts would be helpful to deepen the meanings of them, because they may have close relations with Japanese traditional feelings indispensable to nature.

Key words：Nature 自然，Quality Life 生活文化，Outdoor Education 野外教育，
Traditional Event 伝統行事，Liberal Arts 教養

1.　はじめに

現代社会において、自然をフィールドとする子どものための活動を推進していくことは大変重要である。環境教育の観点、自然の中の活動で自ずと育まれる子どもの健全な心身の発育発達の観点、協調性や克己心、冒険心、判断力といった教育的視点など、いくつもの観点がその理由として挙げられる。また、「ものから心へ」という時代の基調に即したこれからのライフスタイルを考える上でも、あるいは人間の意識が関わる時間の価値を暮らしの中に取り戻すという観点[1]からも自然生活は魅力に満ちている。

しかしながら、私たちの日々の暮らしの中から、自然のリズム、自然の恵みをいただく「自然に即した暮らし」が希薄になるにつれ、子どもの遊びの中からも、親子の暮らしの中からも、自然を活かした、自然とともにある時間空間が失われていく。そのような中で、どうすれば自然を大切にする心を育むことができるだろうか。

それにはやはり、幼少年期にできるだけ自然に触れ、自然と友達になるような体験をたくさん踏ませていきたい。都会の暮らしの中にも季節の移り変わりはあり、虫や花や木々はどこにでもある。気をつければ、たとえ大自然でなくとも、身近な環境の中に「豊かな自然」は満ちている。大人が意識を持ってそこに誘えば、子どもを自然の魅力へと導くことができる。従って、幼少年期の子どもに直接関わる保育者あるいは幼児・児童教育者は、「自然と人間・文化」に関する豊かな教養を背景に、自然の世界へと子どもを誘う自然教育活

動を行うことが重要になるのである。

現在、学校教育をはじめ、地域の自然博物館など社会教育施設による自然教育活動、NPO法人など非営利団体の様々な活動、あるいは地方自治体における子育て支援活動など、子どもを自然の楽しさや魅力に誘う自然教育への取り組みはすでに数多く実施されている。これから求められるのは、その質の向上をいかにはかるかという観点からの研究である。それには、自然の中で楽しく遊んだり、自然の世界に面白く魅力的に誘うプログラムの実践研究もさることながら、本質的には「自然と人間」「自然と文化」に関する知識や感性をいかに豊かに持つかという視点からのアプローチが必要ではないか。本稿では、このような問題意識を背景に、これからの自然教育で大切にしたい考え方を次の手順で検討する。まず、現在行われている自然教育活動の内容を整理して、本稿の考え方を明らかにする。その上で、自然と関わりの深い日本の生活行事を振り返り、日本人が暮らしの中で自然の中に感じ取ってきたものは何か、そこには自然教育の観点からどのような価値が見いだせるかを考察する。最後に、これからの自然教育の質の向上に向けて大切にしたい視点を展望する。

2. 自然教育プログラムの系譜

自然をフィールドとする教育活動の一つの原点は、自然の中で活動する遊びのプログラムを楽しみながら、子どもたちの健全育成をはかろうとする野外教育（Outdoor Education）である[2)]。このような目的での教育活動は、いわゆる組織キャンプ（Organized Camp）という形で、日本でもYMCA、YWCA、ボーイスカウト、ガールスカウトといった青少年団体を中心に行われている。子どもの直接体験を重視する野外教育は進歩主義教育の思想を強く受けたもので、その特徴は、自然の中での様々な体験を通しての「合科教育」というところにある。具体的には、「非日常の自然」という特別な空間の中で、子どもが数日間程度の共同生活を行う。そこでは、集団活動を律する規則正しい生活時間や仲間との関わりの中で、自然という開放的な場を活かした活動、たとえば、ハイキングや水泳といった身体活動、自然の葉っぱや木の実・花などを生かした創作芸術活動、レクリエーション、野外劇場を活用した劇の創作や歌の発表といった演劇・音楽活動などが行われる。キャンプ・ファイヤーやナイト・ハイクといった活動は夜の定番のプログラムである。日頃の清潔で快適な日常生活を離れた自然という場で、家族を離れた子ども同士が集団活動を行うことの教育力は大きく、協調性や自主性、相手を認め合う心などが育まれる。身体や五感で感じた自然は、子どもの脳裏に刻まれて、自然を大切に思う心や相手を思いやる心を育てる。また、自然は様々な刺激を与えてくれる教材となるため、学校の科目教育を横断的に活用する総合学習ができることなど、心身の健全な発達や集団活動の育成、人間性の成長、知識を豊かにすることの両面から、野外教育は可能性に満ちている。

日本では、1961年制定のスポーツ振興法に「野外活動」が位置づけられ、野外教育活動は、自然の試練を乗り越える冒険型のキャンプ[3)]、水泳やカヌー、ヨット、サイクリング、スキーといったアウトドアスポーツ教育の流れと、従来のYMCAやボーイスカウトなどによる青少年教育の流れの二つに大きく分かれることになる。そのため、野外活動は文部省体育局、青少年教育は文部省生涯学習局の管轄となってきたが、2001年の省庁再編による文科省設立と同時に、スポーツ青少年局内に二つの流れは統合され、野外教育活動は、国立青年の家・少年自然の家などの青少年教育施設が主要な実践の場となり、体育学部や教育学部がその人材育成の主翼を担い、今日に至っている。また、1990年頃から子どもの「生きる力」の育成の必要性が叫ばれるようになり、自然が持つ人間形成力に注目した自然体験学習にさらに注目が寄せられている[4)]。自然を舞台に、自然世界から刺激を受けながら、全身を使って身体を動かすと同時に、様々に心を働かせていく力を育む野外教育は、この流れの中で新たにその存在価値を求められ続けているといえよう。このタイプの自然教育活動は、普段の生活を離れた自然という開放的な場を活用し、子どもたちの遊びを誘発し、発想力や協調性、冒険心などを高めて、心と体を育てるということに重点がある。

自然をフィールドとする活動の二つめは、「環境教育」に重点がおかれたものである[5)]。レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」の考え方[6)]、ジョセフ・コーネルによって開発された野外活動のネイチャーゲーム[7)]などは、その例である。ネイチャーゲームは、自然の中で遊びの活動をしながら、人間が、

地球上の多くの生き物の上に立つのではなく、人間も自然の一つとして、動植物と同じ気持ちになって自然を見ることができるようになることを目指して行われる。たとえば、木の幹に聴診器をあててみると、人間の脈と同じように木が息をしている樹液が流れる音が聞こえる。木の根は大きく地面をはっていて、何メートルか離れたところで地面を踏んだ足音が、根を伝わって木の幹で震動するのがわかる。それらに耳を傾けることを通して、自然の命を「感じる」。また、カモフラージュというゲームで、自然の中で上手に身を隠す虫の気持ちを理解する。ビンゴ・ゲームのカードを使って、木や花に一つ一つ個性があることを確かめて歩く。このように、自然に五感を通して関われるように開発されたのがこのゲームである。

これは、日本で熱心に受け入れられ、1986年には日本ネイチャーゲーム協会が発足した。このゲームは、人間も動植物と同じ目線にたって、同じ動物としてこの地球上に生きていることの原点に帰り、自然を大事に感じる心を育むことが目的である。

また、自然と教育をテーマに熱心な活動を行ったポール・ラッシュによって開かれた清里を中心に、キープ協会環境教育事業部が発足し（1984）、第一回清里フォーラムが開かれ（1987）、日本環境教育フォーラムが設立された（1992）。この日本環境教育フォーラムが中心となって、「自然学校」と呼ばれる自然教育活動が展開しており、上に述べたネイチャーゲームの手法も取り入れながら、子どもと自然の橋渡し役をするインタープリターが、子どもと一緒に自然活動を楽しみながら、子どもの自然への感性を養うプログラムが広がっている[8]。

さらに、各地の自然博物館などでは、様々な体験教室を通して、自然に関する知識をわかりやすく子どもに伝え、自然世界に目を向けるきっかけをつくる努力が行われている。

これらのタイプの活動は、自然に心傾けて、「人間は自然の一部分である」ということへの共感の心を育むことを目的としている。

自然教育の第三のタイプは、子どもたちの自然での活動を、地域の漁業・農業・伝承文化等との関わりで深めさせようという生活文化の体験教育に主眼をおくものである。その中には、日本人が培ってきた自然との共生のライフスタイルを大事に考える里山保全の活動や、自然に根ざした生活の伝承文化を子どもたちに体験させようという営みなどがある。これは、町おこし、村おこしの事業でもあり、日本人の伝統の生活が自然と切っても切れない関係にあること、そしてそこからどれほど豊かな恵みをわれわれは得てきているのか、生活文化との関わりで自然の価値を考え、自然と人間の豊かな関わりを考えさせるものである。しかしながら、この種の活動には、プログラムの提供を行う地元の人々の意識を高く保つ必要がある。また、プログラムの設計において、暮らし全体、人間全体について広く眺める目を一方で持たなければ、いまや文化遺産となっている伝統生活技術の切り売りで終わる。子どもたちも、「いろいろな体験をした」でとどまってしまうと、モノがおかれただけの博物館をただ眺めるのと同じで、生きた教材とはならない。生活に深く根ざした自然の価値への動機づけはないままに終わってしまう。

以上、3つの自然教育活動のケースを取り上げたが、いずれの取り組みにおいても、人間と自然の関わりの本質からの発想を根底に持たなければ、子どもの活動に自然を利用するだけに終わる。自然環境保護が大きな課題、および、自然性豊かな暮らしをどう見直すかという課題が拡がるこれからの時代、生涯のクオリティライフの設計の中で自然と本質的に関わるライフスタイルをどう形づくるか、そのための支援学習プログラムはいかにあるべきかという枠組みから構想し、その中に子どもに向けた活動も位置づけることが必要なのではないか。その意味で、これからの自然教育は、自然・人間・文化の本質についての豊かなものの見方をしっかりと根底に置き、上述のような既存の自然教育活動が培ってきたプログラムも活用しながら、生涯自然学習プログラムを構想していくことが求められると考えられる。

では、「自然と人間」の本質へどのようにアプローチするか。自然科学の知識に学ぶ、文学、歴史学、宗教学、民族学、民俗学、神話学に学ぶなど、いろいろなアプローチが「自然」を中心として銀河系のように拡がっていく。それはすなわち、生涯にわたる自然教育プログラムが多彩に拡がる可能性を秘めていることを示すものであろう。自然の中で心身を解放させて身体の健康を取り戻すと同時に、人間の持つ精神性を豊かにすることと深く関わり合う自然教育プログラムを

展開していきたい。

そのような広がりを念頭におきつつ、本稿では日本の伝統的な生活文化・生活行事の中に内在する日本人と自然との関わりを訊ねてゆく。なぜならば、自然の中に人智を超える魑魅魍魎を感じてそこに畏怖畏敬の心を抱いてきた日本人の生活文化の姿とそこに込められてきた意味は、これからの自然へ豊かな心を育む上で大切であると予想され、また上述の3つの自然教育の内容のうち、第三のあり方に、直接の示唆を与えるものだからである。

3. 『近世のこども歳時記』にみる生活行事

生活行事については、古典的なものとしては柳田国男や宮本常一などによる民俗蒐集の仕事があるほか、生活行事辞典の類も数多く刊行されているが、ここでは、子どもの心身の成長、子どもの暮らしとの関わりにおける自然の力という問題意識から、次の文献を活用する。それは、柳田・宮本ら先達の仕事を、現代において深めた民俗学者・宮田登が、その生涯の民俗学研究の中から、次世代へと記録をつなげたいという思いを込めて残した絵本『近世のこども歳時記－村のくらしと祭り－』である[9]。

宮田は、この絵本に描いた物語の舞台となった村を「実在はしていないが、地域的には関東地方の山ぞい斜面にある、養蚕地帯のごくありふれた農村」であると設定し、時代的には、江戸時代の半ば過ぎ、18世紀後半から19世紀の初めのころ、としている。12歳の主人公の女の子の家に、新しく妹が生まれてからの一年間の村の暮らしと生活行事の様子を絵本物語にしている。この設定の中で、宮田が子どもの成長と深く関わる生活行事・生活の風景として取り上げたものにはどんなものがあったのか。そこに含まれている意味を確かめながら辿ってみる。

1) 家族に赤ちゃんが誕生

1月、この家族に新しい女の子が産まれる場面、「とりあげ婆さんがなかなか来なくて胸がドキドキしているとき、ばあちゃんは、そろそろ山からお産を守ってくれる山の神さまが乗ってくる馬の足音がするから大丈夫だんべえ、といいました」[10]というところから物語は始まる。この世に生命が誕生することへの不思議な思いは、それぞれの民族の霊魂観と深く結びつく[11]。日本では妊娠五ヶ月めの戌の日の帯祝い以降は、出産全体を司る産神の支配下となる。そして、臨月になると、馬小屋にいた馬が山の方に向かっていって産神の山の神を乗せて戻ってくる、と考えられていた。赤子は、超自然的な世界に関係すると思われていたのである。無事の出産を経て生後33日め、祖母に抱かれて初宮参り。母子の安全を見守ってくれた産神に挨拶をし、この後守護神として守ってくれる土地の氏神様の氏子となる。この日は、親類知人たちに魂の宿る赤飯を振る舞い、多くの人々の力を借りて子どもの無事の成長を願う[12]。

2) 子どもと節供の行事

「節句」は、江戸時代初期までは「節供」と書かれ、もとは節の変わり目の日の供え物の意味であった[13]。桃の節供は次のような場面が描かれる。「〈子どものまつり　3月3日〉今日は友だちのあやちゃんにお呼ばれして、庄屋さまの家に行きました。庄屋さまがお正月に江戸土産に買ってこられた絵本が一番おもしろかった。『ネズミの嫁入り』という本で、きれいなお嫁入りの行列を、夢中になって見ました。甘酒もほんの少しいただきました。その後、女の子の仲間といっしょに河原で雛流しをして遊びました」[14]。雛人形は、その家に住んでいる人の穢れを吸い取ってくれる形代で、もともとはそれを川に流して祓いをするということに意味があった。この川へ流す儀式がひな祭りとなったので、本来は川辺でするお祭りであった。昔は、季節の変わり目ごとにこの祓えをして雛を捨てたので、他の季節にも祭があったが、特に、3月3日は大潮の日で、穢れたものを川に流すと、遠いところへその穢れを持っていってくれると考えられて、この日のお祭りが大きくなった[15]。この日は、人形に厄を取り込めて流してその子どもの無事の成長を祈る日なのであった[16]。

一方、端午の節供では、「〈端午の節供　5月5日〉村境にある坂野川で隣の村の子どもたちと石合戦がありました。うちの村の子ども仲間が勝ったので、今年は川の中州で遊べます。昨日の夜、村の年上の子どもたちが、こっそり向こう岸へわたって、投げるのにいい石をたくさん拾ってきてしまったそうで

す」[17] と物語られる。

端午の節供は、支那伝承による端午の日と我が国古来の行事とが集合したものだが、その信仰内容には、濃厚に日本的要素が認められる、という[18]。我が国の古俗では、成男戒を受ける若い男を小石の中に埋める儀式が行われる日で、小石は河原に多いところから水辺に関係するようになった。また、菖蒲で作った鬘が成男戒授受の印とされ、それが後に菖蒲冑となり、やがて冑そのものや冑をつけた武者人形を送る風習が生まれた。物語では石合戦の様子が描かれているが、成男戒の儀式が、菖蒲ではちまきをして男の子が石合戦をして勇ましく戦う遊びへと変化したのである。

3) 子どもの遊びと学び

この絵本の中には、子どもが自然の中の遊びを通して自然の豊かさや怖さを知ったり、生活行事の中で子どもなりの役割を担って、のびのびと活躍をしていた様子が描かれる。

たとえば、「〈お化け　7月7日〉今日は七夕の飾りをして、お墓の掃除に行きました。そのときおとっつぁんが、小さいころカッパを見た話をしてくれました。勘太は、まえに鎮守の森で夕方遊んでいた時、ぜったい天狗さまを見たといいます。ばあちゃんはいろり端で、お化けは日暮れ時にでてくるもんだと教えてくれました。お化けたちとは、よくかくれんぼをしたそうです」[19]。7月7日の七夕も、節供の一つである。この日、子どもたちは、短冊形に切った色紙に願いを記して、笹竹につるして飾る。これは、現代にも根強く残る風習であるが、江戸時代の寺子屋の発達や明治以降のお裁縫の上達への願いと相まって盛んになった[20]。

この場面では、夏の遊びの中で、子どもたちが幽霊やお化けにあったり、神隠しにあったりすることが物語られている。遊びの中でのこうした「この世ではないもの」との出会いが、野外の子ども文化となって、子どもたちの心を育てた。「人間には畏怖とか恐怖とかの感情があり、さらに錯覚とか幻覚といった経験がこれと重なり合い、さらには、空想や創造によって、次第に具体的なイメージとなって一つの民俗文化が形作られていった」[21] その現れが、幽霊や妖怪、物の怪といった異界のものである。身近に存在する様々な精霊・魑魅魍魎が、時には悪さをしたり、時にはひょうきんな姿を見せたりする。幽霊は真夜中に、そして化け物は黄昏どき、山の中、辻、道ばた、家の中などに出現する[22]。この異界を排斥せず、子どもはこれらの魔界物を怖れながらも、仲良しになったりもした。天狗、山姥、一つ目小僧、小豆とぎ、雪女、座敷ワラシ、倉ボッコ、船幽霊、河童、産ぶ女など、魔界物の存在を信じることが、逆に、人間の魂の力を太らせ、日本人の自然との共生の暮らしを生むことにもなった[23]。

また、子どもたちは遊びに熱中するあまり、山の中に入り込んで出てこなくなったり、疲れて途中で寝てしまって戻ってこなくなったりする。これを「神かくしにあった」と大人たちは呼んで、地域の人が総出で「返せ」「戻せ」と大声を上げて子どもを捜した。これも、目に見えない霊的世界と日常の世界が、人々の暮らしの身近なところで境界線を保っていたことを示す。そして、子どもはより霊的な世界に近い存在と考えられていたのである[24]。

加えて、子どもたちの暮らしの日常は、野遊びや川遊びに熱中し、すべての生き物に命があり、生と死の戦いがあり、弱者は負けて命が食べられるという自然の摂理を学んでいった[25]。そして「おっかさんが、晩ご飯にドジョウ汁とフナの煮付けをつくってくれました」[26] とあるように、天然の生き物から人間の食べ物を得ていることの実感に満ち、自然の恵みをいただくことのありがたさを学んだ。

一方、手習いの「まなび」の姿としては、1月の天神講が取り上げられている。「今日は天神講です。朝早く、男の子たちは『奉納天満大神宮』と書いた紙の旗を祠に納めてから、寺の本堂に集まりました。いつものように、子供仲間で習字を勉強するのです」[27]。天神講は、菅原道真の命日である1月25日に行われることが多い。怨念を持った未完成霊道真公の怨霊がもたらした災いはすさまじかったが、後世の人々が弔い続ける内にやがてその魂は鎮められ、江戸時代には、学問や文芸の神となった。この日は、子どもが集まって、「奉納天満大神宮」と書いた紙を笹竹に下げて天満宮へ納め、五目飯やおすしを食べてお祝いをする[28]。子どもたちは、学問に長けた道真の大きな魂の力を得て手習いをしたのである。

4) 農作業の循環と子ども主体の共同体の中での育ち

2月麦踏み、5月田植え、9月収穫。豊作への祈りと収穫の感謝。生活行事は、農作業のリズムに合わせて行われる。家族総出で、生まれた赤ちゃんも籠に入れて連れられての田畑仕事である。農作業の中で、子どもたちは、おじいちゃんから昔話を聞いたりする。

人出のいる田植えは、「結（ゆい）」という地域共同体の人たちがみんな集まって、賑やかに行われる[29]。田植えが終わると、結に来てくれた人たちにご馳走を食べてもらい、みんなで村はずれにある天然温泉の共同のお風呂に入る。村人たちがみんなでお風呂に入って疲れをいやしたり、おしゃべりに花を咲かせたり、子どもたちはプールのように飛び込んだり泳いだりしている様子が物語られる。

また、子どもは普段から独自の遊び仲間をつくっており、村の生活行事を行う場面では彼らは「子ども組」として役割を担って集団で活動した。小正月、七夕、盆、十五夜、十日夜などのお祭り日である。そうした生活行事の中の一つ、八月十五夜お月見の日は、「今夜は、おだんご盗みがさかんで、私の家の縁側にも何度も子どもたちがやってきました。おっかさんは、そのたんびに、だんごを盛っていました。今夜だけは、よその家のおだんごを盗んでもよいのです」[30] と物語られる。子どもたちにとってこの日だけは、盗みを働いてもよいハレの日であった。氏神様に供えられた神饌は、誰が食べてもよい、神の前では人みな平等だからという考え方があったのだろう。大人たちは、子どもが神様の代わりにやってきて食べるのだと考えて、せっせとだんごを作って盛る。

10月には農作業も一段落をとげ、これまでの農作業を見守ってくれていた田の神に感謝して、トウカンヤ（十日夜）のお祭りが、やはり子どもの手で行われる。子どもが中心となって「サトイモのくきを芯にしてワラを巻き付け、ワラ鉄砲をつくり」、夜になるとその藁鉄砲をもち、「トオカンヤ　トオカンヤのワラデッポウ　餅ついちゃ　ぶっぱだけ」などと唱えて、家々の庭などを叩いてまわる[31]。藁鉄砲で大地をたたくことで、ふたたび大地の力がついて畑の作物が豊かに実ってくれることを祈願する。「大地を踏みしめる」ということは豊穣につながる行為であり、それを、神に近い子どもが行うことに意味があった。その日は、「鳥を追い払ってくれたかかし」を庭に持ってきて、お餅をそなえる。魂の寄りつくお餅やだんごが神様への大切なお供えだった。神様に自然の恵みを感謝する営みが、子どもたちを中心に執り行われたのであった。

このように、農事を通じて、また、農事と深い関わりを持つ生活行事を子ども中心で行うことを通じて、子どもたちは、大人に見守られながら、自然の中に宿る神々の世界と行き来しながら、成長した。その中心には、「子どもは人間と自然との交流を媒体する」[32] という考え方があったといえよう。

5) 盆と正月

「家に盆棚をつくって、盆花を飾りました。それから家じゅうみんなで、裏手の山際にあるお墓にお参りにいきました。お墓の前では、わたしと勘太が、『じいちゃん、ばあちゃん、この灯りでお出だれ、お出だれ』と唱え言をして、きょうぎを燃やして火をたきました」[33]。7月の年中行事はお盆。今では8月15日を中心としているが、もともとお盆は7月15日を中心としている。「盆だな」を作って祖霊を7月13日にむかえて、飲食を共にして一緒に遊んで魂祭りをして過ごし、16日に送り出す。わが国でお盆が盛んになったのには、6月の末から7月にかけては、時の改まる時で、このときに神が来臨して新しい「春」になると古くから考えられていたからである[34]。

この盆の魂祭りとちょうど対等の位置にあるのが、正月である[35]。新年を迎えて、人々はあらたに霊験を更新させる。この年越し・正月の時期は、子どもたちに忘れられない行事が続く。「もうじきお正月です。今日は、餅つきをしました。わたしは、おっかさんを手伝って、正月の飾り物の準備をしました。暮の13日には煤払いをすませ、その後で門松にする松をとっておいたので、この日勘太はおとっつぁんを手伝って門松をつくりました」[36]。12月13日に一般に行われるススハキ（煤払い）は、単なる大掃除なのではない。ススハキも門松迎えも、ともに正月の神様がこの家にやってきていることを表す[37]。門松を立てて「魂を迎え」るのである[38]。大晦日には、厄神（疱瘡神）を家に招き入れ、もて

なして新年を迎える「厄神の年取り」というお祭りをするところもある[39]。

元旦正月の大正月は、長上に対して服従を誓い、その健康を祈る意味において魂を奉るという宮廷の旧儀が、次第に民間に下って盛んになった[40]。それに対して、14日から15日への年越しは、小正月と呼ばれる。小正月は宮廷行事ではなく、村の民間行事であった[41]。小正月は、農村にとって、一番意味が深く大切な行事である[42]。その小正月には、子どもたちが主役となって活躍する「鳥追いの行事」や「どんど焼き」が行われる。鳥追いは、田畑を荒らす害鳥退治のおまじないの祭りであり、どんど焼きは正月の火祭りである。村ごとに多彩な正月の神迎えが行われたのであった。

こうした生活行事を経ながら一年が過ぎ、赤子の初誕生のお祝いをみんなでするところで、話は終わる。

この一年間の歳時記を通じて、近代化以前の日本の生活には、①子どもは天からの授かりものであり、村ぐるみの子育てであったこと、②子どもの成長に村の生活行事が深く関わり、暮らしのリズムを作っていたこと、③おのおのの生活行事には日本古来の自然観を背景においた霊魂信仰が置かれており、祭りの型を継承することで、その心が伝承されたこと、④自然の力を活用した子供たちの成長があったことなどが示されている。

この絵本を通して見ることができるように、生活の中の自然が子どもを心身ともに成長させる力は大きいことが改めて理解できる。それは、現代の野外教育、無人島冒険キャンプやアドベンチャーレースのような特別な設定を必要とするものとは違い、日常の暮らしにある自然を相手に、石投げ、川遊び、野山遊び、魚取り、トンボ取り、木登り、草つみ、花取り、おにごっこ、かくれんぼ等々、身体を伸びやかに使い、幽霊や妖怪、もののけなど、自然の中に内在する神秘的なもの、霊的なものに心届かせながら、冒険心や人智を超えるものがあることへの謙虚な気持ちが養われていく。暮らしの身近に精霊を感じて草木虫魚たちと一緒になって生き生きと遊ぶ子どもの暮らしの中で、また、一年の中の定められた時期に、神様を迎えたり、神様に感謝したりする神遊びの祭りを子どもが主体となって行う中で、自然への畏怖畏敬の心が、教えられずとも育まれたのであった。さらには、そうした特別なお祭りの日に、「男になること」「女になること」に関わる生命の継承の知識も子ども組の中で伝承されていくのであった。自然生活の中で培われた子ども文化は、大人文化と断絶したものではなく、「人間として生きること」の本質が凝縮されており、子どもたちがその村で生きていく上での精神の故郷を形づくるものであったといえよう。

4. 生活行事の根源をなすもの

ところで、この絵本に描かれた子どもの歳時記を形作る生活行事は多彩に見えるが、それらを貫いているものは、大きく次の3つに集約できるのではないか。

第一に、生活行事の中心をなすのは「神迎え」「神送り」の祭りであること、第二に、神をお迎えするにあたって大切になるのは「祓え」「禊ぎ」「物忌み」であり、それが祭りの形となっていくこと、第三に、祭りの大きな目的（中心価値）は、古い魂を新しくして力強くし、豊穣を願うということである。

まず、生活行事は「神迎え」「神送り」の繰り返しという点だが、生活行事の大切なものとして挙げられる正月・小正月・上巳・節供・春祭り・端午・田植え・乞巧奠・棚機・盂蘭盆・秋祭り・神嘗・新嘗、これらは、すべて「神迎え」の式といえる。村に縁故のある祖先の霊魂をお迎えして「年が改まる」ということが大事なのであり、何回も神迎えをするために祭りの数が増えた。しかも、神の霊力が強ければ強いほど、長居は無用で、さっと来ていただいて、さっと威力を発揮していただいて、気持ちよくさっとお帰りいただくのがよいと考えられたのであった。正月三が日は、そのために必要な日数を示しているという[43]。

節供のお祭りの棚機は、河・海にかけだして作った「たな」で、巫女が海の向こうから訪れる神の来臨を待って衣を織るという日本古来の信仰に由来する。時期を同じくするお盆も、「盆だな」をつくって精霊を迎える式である。田の耕作に関しては、春に春田打ちをして神を迎える。口で今年の出来をほめ、年間の田の行事を物まねで行って、今年の豊作を約束していただく。そして秋、約束通りの上作であれば、再び、神をお迎えし、お礼のごちそうをして、感謝する。これが、秋祭りである。

このように、「神迎え」「神送り」の繰り返しが生活行事となり、村人の一年の生活のリズムを作ってきたと考えられる。

第二の「祓え」「禊ぎ」「物忌み」は、上述の「神迎え」に連関して生じてくる。

「祓え」とは、呪言を唱え、菅・麻のような清浄な草で祓えば、犯した罪が消滅して、清浄な身になる、という信仰である。「禊ぎ」とは、心身をきよめ、神事にあたる資格を得ることである。祓えと禊ぎは本来別のものであったが、やがて、禊ぎをしなければならないときに祓えをすればよい、と考えられるようになった[44]。

上巳・端午のお祭りの本義は、穢れを一身に背負った人形を流して生まれ変わるという禊ぎである。「神迎え」をするためには、精進潔斎、物忌みをして準備をする必要がある。そこから、端午の節供は、女祭りの日ともなった。すなわち、5月4日の真夜中から5日の夜明けまで、家にこもっている女のところへ、村の男が仮装して、田の神となって訪れる。女は田の神の巫女となって、これを待つ。そのために、禊ぎを行って、身を清める。この禊ぎに、端午の日の形代の人形が伴うようになってくる。同時に、田植えのための神迎えの潔斎とも結びついていく。つまり、端午の節供と田植えの始まりとは、実は同じ信仰によるのである[45]。一般に、昔の農村で行われた日本在来の物忌みは、神事の前に、男が神になるため、または女が神に仕える神聖な資格を得るために行われた[46]。この間は、男女が一切の夫婦関係を絶ち、男は男同士・女は女同士で、潔斎の日々を送る。種まき・田植えの時に、男は田の神に、女は早乙女にならなければならないのである。季節的に長雨の続く5月・9月であったので、これを「ながめいみ」とよび[47]、後に「ながめ」だけで物忌みの状態を示す言葉となった。秋祭りの時も、神を迎えるために家の者は物忌みをしなければならない。これを「にへのものいみ」「にへのいみ」といい、「のいみ」が「なめ」となって、「にへなめ」「にひなめ」となった[48]。これは五穀が成熟したあとの、贄として神に奉る時の、物忌み・精進の生活であることを意味する。新しく生ったものを、神に勧めるための物忌みなのである。長い物忌みのあと、新嘗の夜に神が来る、が原義であった。新嘗は、神の命令によっておこなった農事の報告をし、お礼をする祭りなのであった。

これらは一例であるが、神迎えに伴う「祓え」「禊ぎ」「物忌み」が祭りの形を作り、その緊張と解放が、人々の暮らしに活気とリズムを与えたと考えられる。

第三に、祭りは「魂を新しくする」ことに中心価値であるという点である。日本の古代の考えでは、魂は一年間活動すると疲れて役に立たなくなってしまうので、歳の暮れに、遠い山向こう、海向こうのかなたから新しい魂を呼んで身体や土地に付着させて、魂を切り替える「たま祭り」を行う。我々の祖先の信仰では、強い魂をつけると人間は威力を生じ、勢力を増すと考えられていたので、この復活はきわめて大事なことであり、やがて盆と年の暮れがその時期と考えられた。また、秋祭り・冬祭り・春祭りも、もとは一夜のうちに行われる一連のものであった[49]。秋祭りは、「遠来の神に、田畑の成績の報告をすること」であり、冬祭りは、「歳、窮った時期に、神がやってきて、今年の出来たものを受けて、報告を聞き、家の主人の齢を祝福し、健康の寿（ことほ）ぎをするところの祭り」である[50]。「冬の時間」の中で、魂が増殖して新しい春を迎える、と考えられたため、宵のうちに秋祭りが行われ、夜中に冬祭りがおこなわれ、明け方に春祭りが行われる。こうして一夜のうちに、秋から春へと移り変わる。これが本来のかたちだが、太陰暦が輸入されてから、暦法上の秋・冬・春があてはめられて、秋祭り・冬祭り・春祭りとなり、さらにその中へ夏祭りが、割り込んできたという[51]。祭りは本来、新しい力ある外来魂を招き寄せ、魂を増やし、それを土地や人の身のうちに入れて、力を増すということに意味があったと思われるのである。

以上のように、年中行事の祭りの基本の型は、物忌みをして身を清め、神を迎える。神を迎えている間は、神遊びをして人間の側もその心身を解放する。そして、期日がくれば、神に感謝してお帰りいただき、普通の労働の日に戻る。この神迎え、神送りのお祭りを通して人々が期待するのは、土地の魂・国の魂・人の魂といった生きるエネルギーのもととなる魂を太らせることであり、そのことにより、村の生活の繁栄、人々の幸福がもたらされると考えられたのであった。神霊と関わるこうしたお祭りは、やがて年中行事として定型化され、型に従ってこれを「繰り返す」ことが、農村の人々の生活と心の支えを形作り、自然に即した生活

文化を生んだ。子どもは、生まれながらにして村の共同体の一員であり、小さいうちから村の生活行事に参加することを通して、神霊の宿る自然への心、自然とのつきあい方、お祭りを通して知る人智を超えた神々の世界の大切さ、その感性を受け継いでいったのである。

5.　「生活の古典」の力

古典の言葉の中に、文字を持つ以前のいにしえのやまとびとの心を生涯にわたりたずねつづけ、国学・国文学・民俗学、また歌人としても著名な折口信夫は、日本人の自然に根ざした生活の中で繰り返されてきた生活行事を、「生活の古典」と呼んでその伝承に格別の意義を認めている。「世間でする年中行事を、私は『生活の古典』と称してゐる。我々は文学・文献の古典に、生命の新しい泉を求めるやうに、常人は、くめども尽きぬ民族生命の歴史を、此生活の古典から得てゐるのだ」[52]。

たとえば、「春の七草」の行事は、新年に「若水迎え」をして若さが帰ってくることに人々が喜びそれを「変若水」と呼ぶようになったのと同じ考えで、「若菜迎へ」をする。その時に、七草をまな板の上でたたくが、これは「たたく」ことによって、この新しい食物に霊的な優れた力を入れて、権威ある魂をつけようとする昔の人々の考えである。生活の中で儀式化してきた生活行事には、自然に心ゆだねながら生活の意味を得ようとした深い民族の心が宿されている。

「古書を古典と呼ぶならば、田舎の年中行事は、すなわち、生活の古典である。我々が、古事記・日本紀・万葉集等を読むのは、直接利益を得る為とか、気分の上の影響とかを別としても、其等古典を読むことによって、何となく背景のある、うるほひのある生活を求めるからである。これとちょうど同じやうに、田舎で年中行事を繰り返すのは、床しく古へを振り返る事になる。我々の生活には、生活上の古典となるものが、失はれてはならない」[53]。

私たちは、古典の言葉を読んでいると、遠い古人の息づかいを感じ、長い歴史の中で継承されてきた言葉の中に自らを置くことで、大きな安らぎを感じる。それと同じように、年中行事は、長い時代を経てきた生活様式を、ある決まった時期に復習することであり、それは、日常の世知辛い、あくせくとした我々の生活の間に、「憩ひある日を持ち来す」のである。ここに「生活の古典」の意義がある。

では、「生活の古典」を繰り返し行うことで得られる憩いとはいかなるものか。それは古典を読むことによって得られるものと同じ憩いの価値であるというが、それは、どのような意味を持つものであろうか。

古典として、われわれが目にすることができる最古のものは、古事記である。その言葉の内には、長い間伝承されてきた神話の時代のやまとびとの心が孕まれている。端的に言えば、それは種の繁栄であり、恵みをもたらす四季が滞りなく循環していくことへの願いであり、国・邑の生活の安定であった。その祈りの思いは、力ある歌の言葉に託され、国を治める力ある貴人に捧げる言葉、力ある貴人が発する言葉となり、日本の文学の伝統を生んだ。ところで、そもそも歌の言葉の源は、どこから来たかと言えば、日本人が魂のふるさとと考えた常世国から、時を定めて訪れる「まれびと」（来訪する神）がもたらす呪詞にある。まれびとが発する呪詞、すなわち言霊をもった詞が、土地の山川草木に働いてエネルギーを与え、霊格の低い魑魅魍魎の精霊の力を鎮めた。そこで語られたものが叙事詩となり、その中でも、もっとも力のこもった短い抒情的な詞章が、後の歌へとつらなる[54]。すなわち、まれびとの発する詞から、日本の文学は生まれ「古典の言葉」として今日に残り、まれびとを迎える儀式が「祭り」となり、「生活の古典」となっていったと考えられる。

年中行事は、まれびとを迎える日本古来の祭りの文化から生まれた。その発生における根本の精神は忘れられても、形は変遷しながら残り、やがて暦日が定められてわれわれの生活に定着した。従って、年中行事を通して、われわれは、記録時代以前のわれわれの祖先、やまとびとの心へと思いを届かせていくことができるのである。

文字の読める都の教養人が心太らせるには「書物の古典」があった。それに対して、庶民には、「生活の古典」があった。真面目な労働の日々の合間に配された「生活の古典」という「神遊び」の日々を繰り返しなぞる。神遊びの伝統は、ものいみをして海の彼方から神迎えをするための手だてを教え、人々はこの型の継承を通して、神を歓待して生活の繁栄を祈り、「大いなる憩い」をいただいたのであった。この生活の古

典が失われることは、自然と日本人の間の心豊かな関わりを失うことに等しい。そして、そのことによって、「大いなる憩い」「大いなる恵み」も失われ、自然に対する感性も衰えていくのは必定ではないだろうか。

「書物の古典」がそれを愛する人に精神のよりどころをつくるように、「生活の古典」は、それを大事にする村人にとっての「心の拠り所をつくる」という意味で、大切な生活の基礎なのであった。そこでもたらされる「大きな憩い」は古典を読むことを通して得られる憩いと等しい。すなわち、それは、単なるひとやすみの休息や日頃のとらわれからの解放といった意味での憩いではなく、太古からつらなる日本人の心の伝統の中に自らを位置づけ、大いなる自然の価値の前に自らを開き、その恵みを受け取ることによって得られる安心感の中に生み出される憩いの価値なのであった。

このように年中行事の意味と形を概観してみると、この長い心の伝統の中に、自然を慈しむ心を育む自然教育のあるべき姿の原点が求められると指摘できよう。

6. 自然教育として学ぶ視点

以上を通じて、これからの自然教育の視点として、日本の生活行事の祭りの精神に何を学ぶか。それは、私たちもまた「生活の古典」を大事にしていきたいということである。祭りの中で、本質的には、神々の世界への感謝と畏敬の念が育まれる。自然に対して、人間はおごってはならない、ということを学び知っていく。そうした祭りが暮らしの中で持っていた精神を、われわれの自然教育活動の中でももっと大切に考えるべきである。

戦後、それまでの農業中心の生活の営みから離れるにつれ、われわれは「生活の古典」が長い間伝承してきた意味と形を暮らしの中からどんどん失ってきている。農事に根ざしていた旧暦から新暦に変わり、その併用がもはや生活の実感を伴わなくなったことも影響している。生活行事の中で培われた自然への畏怖畏敬の気持ちは伝承力を失い、日本人と自然の本来の関係が失われたことは大きい。

昔を懐かしみ、「生活の古典」を暮らしに根ざした形で復活させるのは、もはや難しい。われわれは自然のリズムとはかけ離れた近代的で便利な生活にすっかり慣れている。「生活の古典」が持っていた価値が、暮らしに根ざしていない限り、それは廃れていくことはやむを得ない。

しかし、ここに見てきたように、「生活の古典」が、子どもたちを自然の中でしっかり育んでいく豊かな教育力を持ち、大いなる憩いをもたらし、日本人としての心を育み、自然の懐に抱かれた人間のあるべき姿を伝えるものならば、その本来的意味は、しっかりと、非日常の余暇活動の自然教育のプログラムを通して、継承していくことには大きな意味がある。これからの自然教育活動の大きな責任の一つと言ってもよいのではないか。日本人と自然との関わりの中に生まれてきた暮らし、生活行事の意味と形からたぐり寄せられる日本人の感性は、これからの自然教育のあり方に大きな示唆を投げかける。改めて考えられるべきは、自然への畏怖畏敬の心を、自然教育活動の中で、いかに本格的に育み、それを新たなる時代の生活文化へとつなげていくかという課題である。

そのためにはどういうことが考えられるか。第一に、提供されるべきプログラム内容からいえば、まずは、ここにあげた生活行事の「形」の継承を続けていこうという意志を強く持つことである。もはや日常の暮らしには根ざしていないため、その心を失わないまま継承・復活していくことは難しいが、できるだけ伝承者を捜して体験する機会を繰り返しもうけることは、やはり行うべきである。あるいは、日本の古きよき伝統を踏まえながら、それを現代風に蘇らせて再生する取り組みをしている人からモダンな感覚を得て、新しい伝承復活運動の展開を考えることも可能であろう。

第二に、伝統行事・伝統的な文化遺産となった生活行事の形に「意味」を重ねていく努力を怠らないことである。たとえば、子どもの伝承遊びの鬼ごっこやかくれんぼ、かごめかごめなどにも、民俗学的な意味がある。自然教育プログラムを提供する者は、子どもたちをいろいろなゲームで遊ばせるだけではなく、日本人の伝承遊びの中に込められてきた自然と神に関わる知識を深めた上で、子どもたちとの遊びの機会を持とうという姿勢が大切である。また、田植えや収穫祭、お月見など、生活行事に関わる自然体験プログラムも現在いろいろ行われているが、そういう場の提供においても、ただ形をまねて体験させるだけでなく、その意味を知って伝統行事の見方を豊かにしていくような

内容に少しでも工夫していきたい。そのためには、プログラム提供側がそれぞれの生活行事の中に込められてきた意味をよく勉強をした上で、プログラムの内容や構成を考えていく必要がある。

第三に、ここにみた生活行事に通底する価値とは、自然に対して日本人が感じてきた霊魂感である。そこへの理解を深めるには、実は、言葉に魂が宿ると考えてきたやまとことばの世界を教養として深め、日本人の文学の伝統を豊かに知っていくという教養教育が、一方で大切なことになる。

たとえば、言葉に霊魂が宿ると考えた日本人の言霊思想についても知れば、言葉を介して自然に関わるということの意味も深まる。また、人々の心の拠り所となる大切な祖霊は、遠い海の彼方の常世国から、まれびととなって時を定めてやってくる。その時に発せられる呪言こそ、和歌の起源であり、日本文学を生みなす源である、ということを知れば、古典の詞華集の数々を教養として学んでいくことも大切になる。生活行事・祭りと直接的に関わる諺、伝説、神話、昔話などを数多く勉強することも必要である。たとえば、かぐや姫の「竹」と節供の「節」との関係、たまばたつめの伝説と天の羽衣との関係などがすぐに思い浮かぶ。さらに、日本人の独特の霊魂信仰である「たま」「たましい」「もの」の信仰について深く捉えるためには、たとえば、源氏物語の中で、その深い思いから生霊となり死霊となって現れ出る六条御息所の物語は教養として学ぶのにふさわしい。加えて、文学を学ぶだけでなく、絵画・舞踊・能・歌舞伎といった、様々な芸術の領域で古典文学を楽しみ深めていくことを通じて、日本人の自然観と文芸芸術への思いを深めていく。茶の湯・立花・香・作庭といった、生活芸術の楽しみの世界も拡がる。こうした一連の教養が、生活行事が宿す日本人の心を深めていくのにはとても重要な意味を持ってくるのである。つまり、「生活の古典」の世界をより知的に深めるためには、古典の世界を紐解くことが求められるのである。文学と諸芸術との関わりの中で日本人にとっての自然の意味を深め、それを自然教育のプログラムに活かすことができるようになれば、これからの自然教育活動は、大きな可能性と拡がりの世界を持つことになるであろう。

現在の自然教育プログラムの問題は、生活行事の「形」だけの提供はできるが、現実には暮らしにはないため、一時の経験に終わってしまう、ということである。「経験」をいかにして「意味」につなげるか。そのために、自然教育の指導者が学ぶべき日本の伝統文化・生活行事の世界は奥深い。そして、そのことに対する深い教養を養うためには、日本の文学・伝統芸術の世界を広く深く学んでいく姿勢こそ求められるといえよう。

最後に付言すれば、ここに考察してきたことは、保育や教育の現場で幼い子どもたちの心と体を育むことに責任を持って携わる保育者・幼児教育者が取り組み、園のお祭りプログラムなどに少しでも活かされるようになることがのぞまれる。古のスタイルをよく知って、継承していきたい。そのためには、ここに論述をすすめてきたような教養が、保育者に求められる。保育者は、現場の課題に対応する実務的な技能を身につけることがもちろん大切だが、一方で、このような教養を学ぶ努力を続けることは、保育者にとっての生涯学習としての価値がある。通常の保育の現場に生きる技能の習得やスキルアップという問題意識から少し距離を置いて、人間の本質へのまなざしを大切にする時空間を保育者自身が持つ。「人間・自然・文化」の関わりへ目を向ける精神の営みを日頃から大切にした上で、保育の質を見つめるという姿勢は、これからの人間性豊かな暮らしへの橋渡しを担う保育者のあり方として大切なことではないだろうか。保育者が、広い教養を持って、日本の生活文化の豊かな知識を背景に保育にあたる。それは、保育者養成の姿を「職業のための教育」から「人間のための教育」へ[55]と変えていく可能性に満ちている。その意味で、質の高い人材育成が期待される大学の保育者養成課程において、より広いものの見方を養う教養教育に力を入れることが求められるのである。

【註および引用文献】

1) 人間の実存は、空間性にあるのではなく、時間性にある。人為とは質の違う機械技術に頼る現代の技術連関社会においては、その時間性が捨象される傾向にあり、そのために様々な人間疎外の現象があらわれている。その意味で、機械技術に頼ることのない自然世界での活動においては、人間の「意識」が深く関わるという点において、自然の中での活動に人間回復の手だてはある。子どもたちにも、自然の中でしっかりと自分の身体を使って動く経験は、人間性の基礎を築くものとして大切である。今道友信：自然哲学序説、講談社学術文庫（1993）
2) 組織キャンプの始まりは、1826年に米国マサチューセッツ州で行われたラウンドヒルスクールであるとされる。野外教育の歴史や考え方は米国が先導してきた。野外教育という用語が始めて登場したのは、1943年に発表されたシャープ（Sharp,L.B）の'Outside the Classroom'という論文とされる。日本では、1960年頃から浸透を始める。日本野外教育研究会編：野外活動、pp.18-22、杏林書院、(2001)
3) 冒険教育の起源は、1941年ハーン（Hahn, K）によってイギリスのウェールズに設立されたOBS（Outward Bound School）とされる。海や山などでのサバイバル活動による教育がその特徴である。OBSは米国で急速な発展を遂げ、指導者養成も行われて今日ある地位を確立している。一方、自然の中の冒険教育の教育プロセスを人工的な専用施設を用いて行うPA（Project Adventure）と呼ばれる活動も生まれ、日本でも専用施設が拡がって、社員教育や子どもたちのグループ教育活動に活用されている。野外教育研究会編：同上書、p.20
4) 朝岡幸彦篇：新しい環境教育の実践、pp.75-78、高文堂出版社、(2006)
5) 環境教育への先鞭をなしたのは、レイチェル・カーソンが著した'*Silent Spring*'（邦訳『沈黙の春』）(1956)とされる。著者は数年にわたる環境破壊に関わるデータ収集をもとに、「このままでは、新しい生命の息吹を感じる春が来ても、鳥の声も聞こえぬ地球になってしまう」と地球環境への警鐘を鳴らした。レイチェル・カーソン（青樹築一訳）：沈黙の春、新潮社、(2001)
6)『沈黙の春』を著したレイチェル・カーソンが、甥と過ごした夏の別荘での思いをつづった遺作が'*The Sense of Wonder*'（邦訳『センス・オブ・ワンダー』）(1965)である。著者はこの中で、自然への感性を豊かにすることの大切さを語り、そのためには「少なくとも一人の大人が、子どものそばに寄り添って、自然の神秘や素晴らしさに触れることの価値に誘うことが大切である」というメッセージを残した。そこに記されたのは、風や波の音に自然の深淵なる息吹を感じ、花々の絶妙な色の美しさに創造主の素晴らしさを感じ、一足ひとあし、自然の道を踏みしめることに深い思いを重ねる大切さである。そうして、人間もこの自然の中の一部であることに謙虚になることが大事である、という思想である。レイチェル・カーソン（上遠恵子訳）：センス・オブ・ワンダー、新潮社、(1996)
7) ジョセフ・B・コーネル（日本ネイチャーゲーム協会監修）：ネイチャーゲーム1～4、柏書房、(2005)
8) 朝岡幸彦篇：同上書、p.78
9) 宮田登（太田大八絵）：近世のこども歳時記、岩波書店、(2001)
10) 宮田：同上書、pp.2-3
11) 宮田登:正月とハレの日の民俗学、p.82、大和書房、(1997)
12) 宮田：同上書、p.87
13) 田中宣一・宮田登編:年中行事事典、p.1、三省堂、(1999)
14) 宮田：前掲書（2001)、pp.10-11
15)『源氏物語』の光源氏、須磨流謫のくだりにも、三月の節供に大きな人形—自分の姿に似せた人形を船にのせて流す描写がある。雛人形は、禊ぎ祓えに用いる形代の変化したものである。なぜ、上巳が女、端午が男の節供となったかというと、山ごもり・野遊びの時季になっていたに過ぎない、という。折口信夫：雛祭りとお彼岸、折口信夫全集17、pp.195-197、中央公論社、(1996)
16) 折口信夫：雛祭のおこり、同上書、pp.184-187
17) 宮田：前掲書（2001)、pp.14-15
18) 折口信夫：民俗学上よりみた五月の節供、同上書、pp.235-242
19) 宮田：前掲書（2001)、pp.22-23
20) 田中・宮田編：同上書、pp.242-245
21) 宮田登：妖怪の民俗学、p.24、筑摩書房、(2002)
22) 宮田：同上書、p.22
23) 宮田登：老人と子供の民俗学、pp.164-166、白水社、(1996)
24) 宮田：同上書、pp.102-105
25) 宮田：前掲書（2001)、p.53
26) 宮田：同上書、p.21
27) 宮田：同上書、p.4-5
28) 宮田：前掲書（1996)、p.163
29)「ゆい（結)」とは、お互いに仕事を手伝い合う村の仲間のこと。大がかりな農作業をはじめ、茅葺きの屋根の葺き替え、家屋の建築などに、力を貸し合った。宮田：前掲書（2001)、p.53
30) 宮田：同上書、pp.30-31
31) 宮田：同上書（2001)、p.34-35
32) 宮田：前掲書（1996)、p.124
33) 宮田：前掲書（2001)、p.26-27
34) 折口信夫：年中行事、p.30、折口信夫全集17、中央公論社、(1996)
35) 盆行事と正月行事はその構成がよく似ている。盆の準備にあたる七日は、暮の十三日の煤払いに相当、盆棚は、正月の神を祀る年神棚にあたる。お中元の贈答とお歳暮の贈答、送り火・迎え火の火祭りは、正月のどんどん焼きの火祭りに対応させることができる。つまり、盆にくる先祖と、正月の歳神とは、同じ根の上に立った信仰対象であり、祖霊信仰という体系がそこに成り立っていることが理解される。宮田登：暮らしと年中行事、p.94およびp.140、吉川弘文館、(2006)
36) 宮田：前掲書（2001)、pp.38-39
37) 宮田：前掲書（1996)、p.169

38) 折口信夫：年中行事、p.85、同上書（1996）
39) 田中・宮田編：同上書、p.59-61
40) 折口信夫：正月の儀式、pp.177-183、同上書（1996）
41) 宮田：前掲書（2006）、p.86
42) 折口：年中行事、p.23、同上書（1996）
43) 折口：年中行事、pp.21-35、同上書（1996）
44) 折口：年中行事、p.47、同上書（1996）
45) 折口：年中行事、pp.28-29、同上書（1996）
46) 折口：年中行事、p.40、同上書（1996）
47) ちょうど驟雨が降り続く頃で、性的に満たされない鬱屈状態をしめす言葉でもある。源氏物語の有名な「雨夜の品定め」はこの「ながめいみ」の頃の状態を示す話である。折口：年中行事、p.40、同上書（1996）
48) 折口：年中行事、p.31、同上書（1996）
49) 折口信夫：大嘗祭の本義、pp.123-192、古代研究Ⅱ－祝詞の発生、中央公論新社（2003）
50) 折口：大嘗祭の本義、p.138、同上書（2003）
51) 折口：大嘗祭の本義、p.138、同上書（2003）
52) 折口信夫：常世浪、p.93、折口信夫全集 17、中央公論社（1996）
53) 折口：年中行事、p.15、同上書（1996）
54) 折口信夫：古代研究Ⅲ－国文学の発生、中央公論新社、(2003)
55) 稲垣良典：天使論序説、pp.190-191、講談社、(1987)